古代の山陽道 ～馬駆ける、都から北九州への道～

古来から日本の先進地域であった近畿と北九州を結ぶ非常に重要な街道が山陽道です。弥生時代以来、米作りや金属類の使用など大陸から北九州に伝えられた先進文化は、瀬戸内沿いの山陽道を通って近畿地方に伝えられました。『日本書紀』には天武14年（685年）9月「直広肆佐味朝臣少麻呂を山陽の使者と為す」とあり、律令時代以前の山陽道の存在を示しています。

官道として古代山陽道が整備されたのは8世紀。律令制の下、中央と地方諸国を結ぶ重要な道として東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道の七道が整備されました。七道は政治的・軍事的に人々が素早く大量に移動できるよう、当初は12m、その後は9mまたは6mの幅で最短距離を直線的に通るよう敷設されました。これらの道は重要度と使用頻度によって大路・中路・小路に分けられ、山陽道は唯一の大路でした。道路に沿って人や馬を常備した駅（駅家）を設置する駅制が敷かれ、最盛期には多くの人が行き交いましたが、9世紀になると律令体制の弛緩とともに駅制も衰退しました。駅家は次第に機能を失い、道そのものも、より地形を利用した経路へと変化していきました。

駅家

七道には大宝律令の制定以後、30里（約16㎞）ごとに駅家が置かれました。大路の駅家には20頭の馬が置かれるのが原則でした。しかし、実際には律令の規定よりはるかに短い間隔に駅家が設置され、最盛期には摂津の駅家では35頭の馬、播磨の駅家では25頭の馬を備えていました。律令制定当時、山陽道を通る人の行き来が頻繁だったことがうかがえます。ただし、駅家は一般の人が使うものではなく、外国からの使者や官命を受けた官吏の交通・宿泊に使われました。そのため、瓦葺きで白壁の立派な建物であったと考えられています。姫路市内には佐突・草上・大市（邑智）の3駅と各25頭の馬が設置されていました。

古大内式軒丸瓦　小犬丸遺跡

古大内式軒平瓦　小犬丸遺跡

▲播磨国の山陽道沿いでは、一定の間隔で同じ文様の瓦が出土しています。これらの遺跡が駅家跡と推定されています

■播磨の駅家と比定地

駅家名	比定地
明石	明石市大蔵谷？
邑美	長坂寺遺跡（明石市魚住町長坂寺）
賀古（加古）	古大内遺跡（加古川市野口古大内）
佐突	北宿遺跡（姫路市別所町北宿）
草上	姫路市内？
大市（邑智）	向山遺跡（姫路市太市中向山）
布勢（布施）	小犬丸遺跡（たつの市揖西町子犬丸）
高田	神明寺遺跡（赤穂郡上郡町神明寺）
野磨	落地遺跡（赤穂郡上郡町落地）

姫路市内の駅家

佐突駅家

別所町の東部にある北宿遺跡が佐突駅家跡ではないかといわれています。別所小学校には北宿遺跡出土の古瓦・珠文帯均正唐草文軒平瓦が保管され、「別所村北宿廃寺　字檀」の箱書きがあります。佐突駅家は『播磨国風土記』にも『延喜式』にも記載がなく、『続日本後期』に承和6年（839年）2月に「旧によりて建立」されたと記されていることから、いったん廃止された駅家が再び設置されたとみられています。

草上駅家

草上駅家があった場所については、辻井廃寺跡だという説や、高岡の草上寺付近という説など諸説あり、特定されていません。

大市（邑智）駅家

『播磨国風土記』に「邑智駅家」として記されています。向山遺跡の小瓦出土地が大市邑智駅家跡と考えられており、現在発掘が進められています。また、太市には「馬屋田」という字名が残っています。

▲山陽道から見た大市（邑智）駅家跡

STORY

野磨駅家の毒蛇伝説

野磨駅家の名は、平安時代の説話集『今昔物語』巻14に見られます。金峰山の僧である転乗は、幼いころより法華経を習い6巻までは覚えることができましたが、7・8巻だけは覚えることができず悩んでいました。あるとき夢に夜叉の姿をした人が現れて、「残りの7、8巻を覚えることのできないのは、前世が毒蛇（おろち）であったころの宿縁によるものだ」と語りました。それは転乗の前世が播磨国赤穂郡の山駅（野磨駅家）に住む長さ3尋半（約6.3m）もある大蛇で、ある夜、駅家に泊まった一人の聖人を食べようとしたところ、聖人が法華経の読経を始めました。毒蛇は聖人を食べるのをやめ、一心に法華経を聞いていましたが、6巻を読み終えたところで夜が明け、7、8巻を読まずに聖人は出発してしまいました。法華経を聞いたおかげで毒蛇は人に生まれ変わり、僧となることができましたが、前世で7、8巻を聞いていないため、なかなか覚えることができない。一心に精進すれば今生では願いごとが皆かない、後世では生死の苦を離れることができるという内容でした。そこで、転乗は一層熱心に法華経を読誦するようになりました。この毒蛇の話を伝え聞いた清少納言は『枕草子』第225段で「あはれなる駅」として野磨駅家について記しています。野磨駅家は落地遺跡に比定され、東西68m、南北94mの敷地と敷地内の建物や門跡がほぼ完全な形で残っていることが確認されています。